

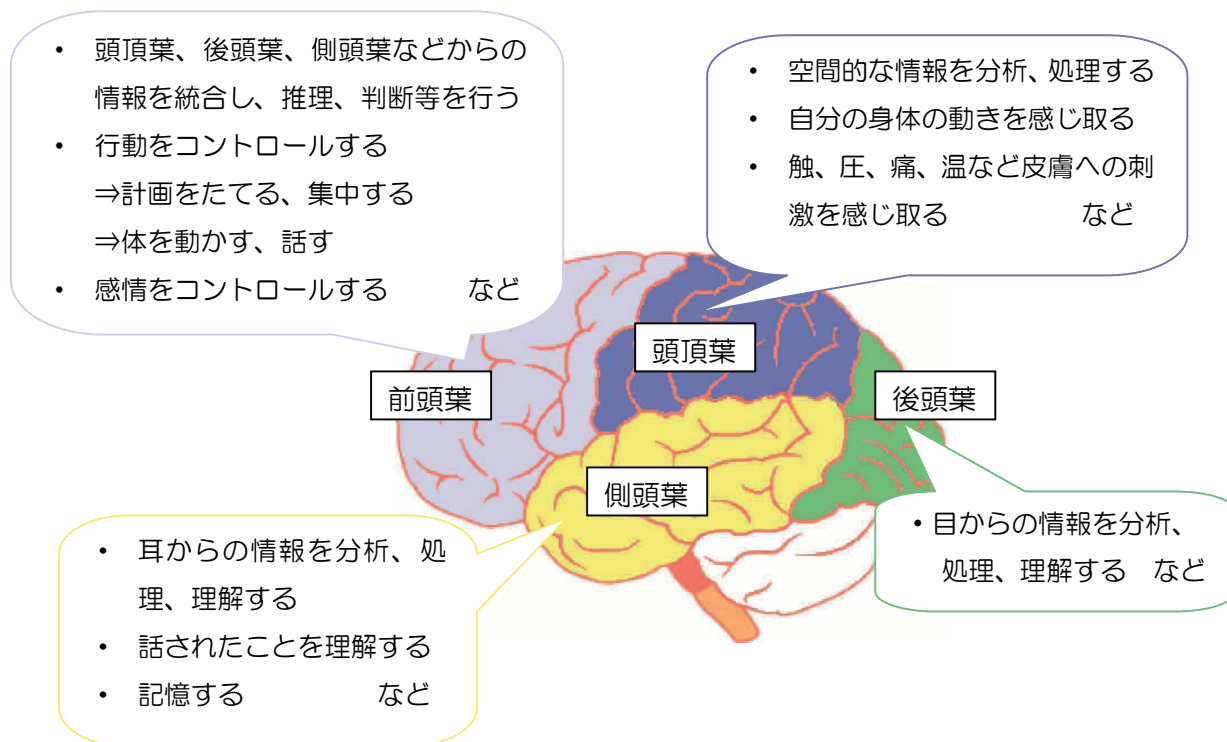
第二章 脳の働きと発達障害

発達障害は、以前は保護者の愛情不足や養育の誤りと思われていたことがありました。しかし最近では研究が進み、発達障害の子供は、生まれつき脳の機能に違いがあることがわかりました。脳の機能の違いが行動にも影響しているのです。

支援者が子供の脳の働きの特徴を知り、特徴に合わせた支援をすることが必要です。

1 脳の働き

脳には、それぞれ視覚や運動、記憶などをつかさどる部位があり、それらが「神経ネットワーク※」でつながって、物事を総合的に判断しています。



記憶の中核「海馬」や、感情や情動の調整をつかさどる「扁桃体」は、脳の内部にあります。

※ 「神経ネットワーク」とは・・・

脳の神経細胞は、一つ一つの細胞がたくさん突起を伸ばし、仲間の神経細胞とつながり、さまざまな情報をやり取りしています。この、網の目のように張り巡らされた神経細胞どうしのつながりを「神経ネットワーク」と言います。

発達障害は、脳の各部位の機能や神経伝達回路がうまく機能していない状態です。しかし、「できない」訳ではなく、情報処理の仕方を練習したり、自分なりの方法で対処するコツをつかめば改善していくことが多いことがわかっています。

不適切な行動を無理やり抑制したり、禁止するだけでは、行動の修正につながらない場合がほとんどです。その行動がどこからくるのか考えることが、不適切な行動を起こさない環境を作る第一歩となります。

子供は、「いつも叱られる。」という低い自己評価から開放され、自己肯定感が高まるでしょう。これが二次障害の予防につながります。

三倍ルールでいこう！

発達障害の子供は、自己評価が低いことが多いため、子供の良いところをなるべく見つけていきましょう。

「三回褒めて一回叱る」くらいのバランスが良いでしょう。



豆コラム5 10歳ごろまでに自分と向き合える勇気を育てよう！！

10歳ごろは前思春期、自我が芽生える時期です。個人差はありますが、この時期に、子供が自分と周囲の子の違い（行動や物事のとらえ方）に気がつき、自分の行動をコントロールできるように関わることが望ましいでしょう。

席を立つ子の場合、「他に席を立つ子はいるの？」「立つ子が良いの？立たない子が良いの？」などと問いかけて、「普通は席を立たない」ということを意識づけていきます。この時期までに自分と向き合って、行動をコントロールしていく勇気を持てるよう、自己肯定感を育むことが大切です。



2 発達障害児によく見られる脳機能の特徴

(1) 記憶の仕方に特徴がある

出来事をそのまま記憶することがあります。

幼稚園に行った
アイスクリームを食べた
幼稚園でケガをした
車で出かけた

記憶力はよいが記憶の引き出しに上手に整理できない。一枚一枚ばらばらな写真のような記憶。

話すときも整理されないまま、そのまま話してしまいます。

手をケガしたの！
ソフトクリームはおいしい！

昔おこった嫌なことを昨日のこのように思い出してしまうこともあります。

..... 通常は

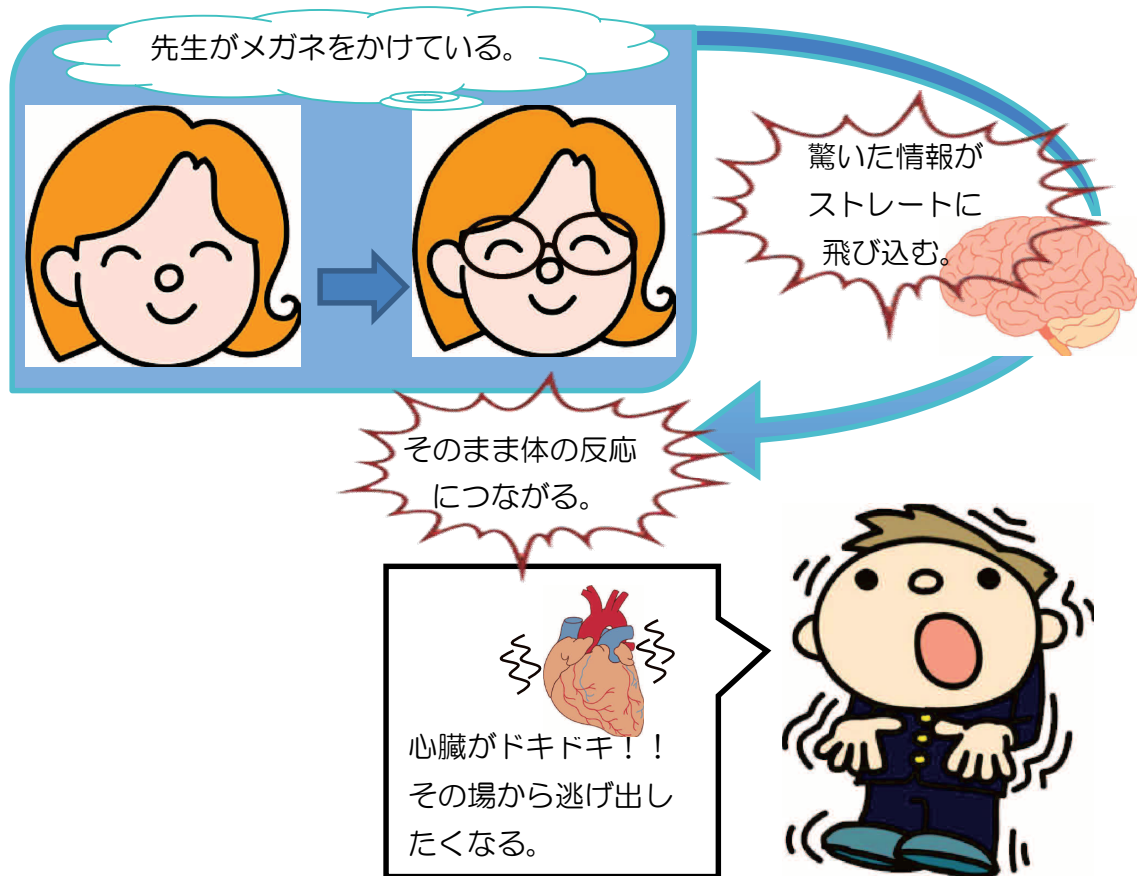
出来事を整理しながら記憶するので順序立てて話せます。

幼稚園のこと

今日ね、幼稚園で手をケガしたの。痛かった。

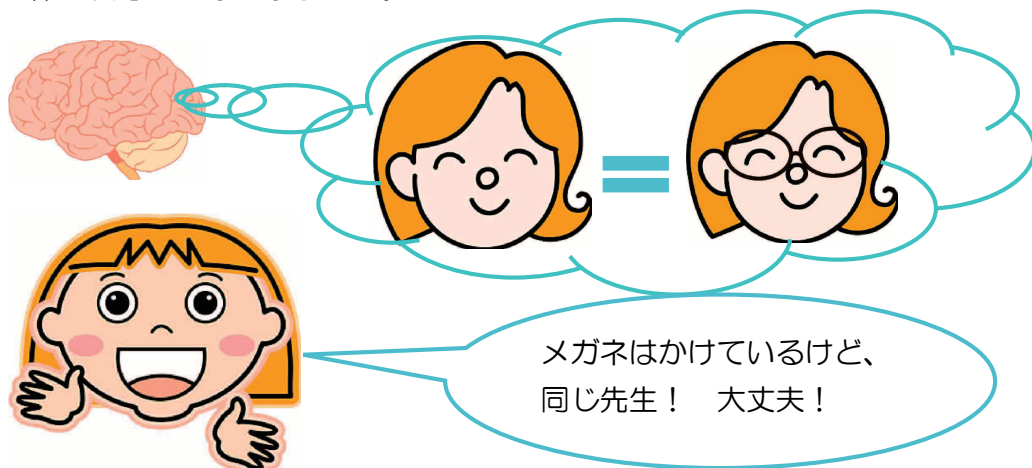
(2) 少しの変化に戸惑うことがある

いつもと違う出来事（例えば、先生がメガネをかけている）に驚くと、驚きがそのまま体の反応につながる場合があります。



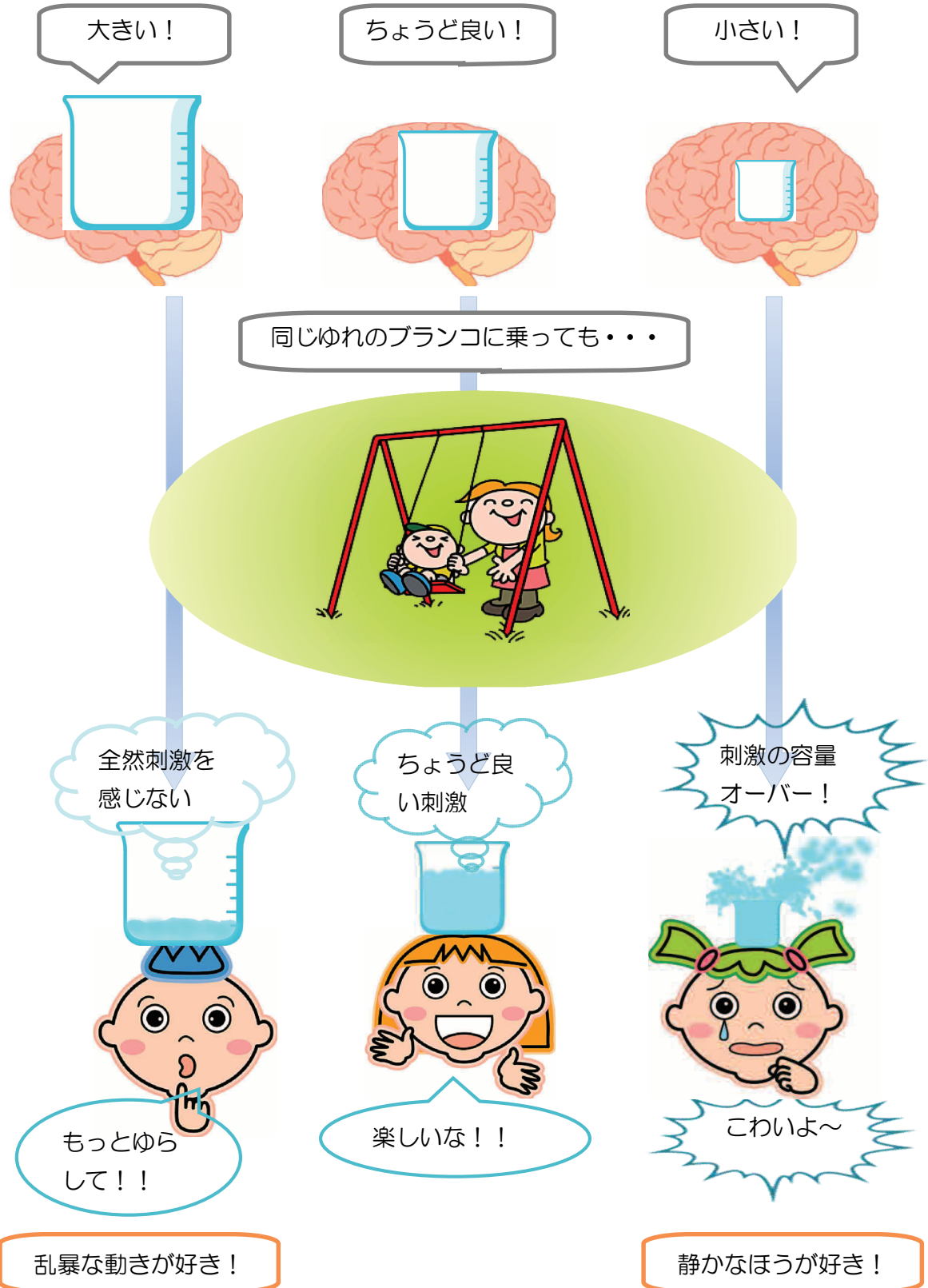
..... 通常は

今まで蓄えた知識の中から驚くべきことか判断できます。
驚きは体の反応につながりません。



(3) 刺激の感じ方が違う

脳の中の刺激を感じる入れ物が、大きすぎたり小さすぎたりすることがあります。



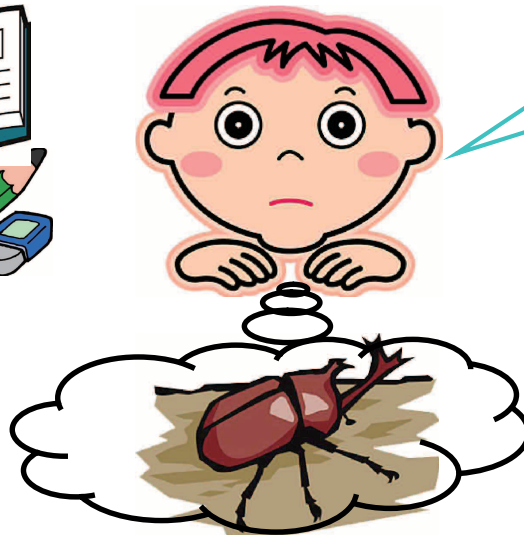
(4) 探し物が苦手なことがある

多くのものの中から、必要なものを選別することが苦手なことがあります。
例えば、先生が勉強の準備をするように言っても・・・

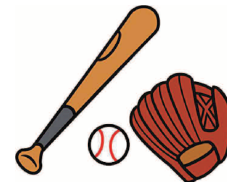


勉強する準備を
してください。

興味のあるものに気を取られ、今必要なものがわからなくなってしまう。



ぼくはカブトムシが
好き！！



..... 通常は

他のものに興味は惹かれても、勉強に必要なものを見つけられます。

勉強にはノートと
鉛筆が必要



(5) 感覚（視覚、触覚、聴覚）が過敏



(6) 耳で聞いた情報の整理が苦手

例えば、先生が口頭で持ち物や注意点を伝えてもわからなくなってしまいます。

